



Title	ドルーシカとは誰か : ロシア農村の婚礼メンバーについての考察
Author(s)	伊賀上, 菜穂
Citation	大阪大学言語文化学. 1998, 7, p. 5-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78063
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ドルーシカとは誰か

—ロシア農村の婚礼メンバーについての考察—*

伊賀上 菜穂**

Дружка — традиционный распорядитель в русских свадебных обрядах. Ученые показали удивительное разнообразие роли дружки и принципы его выбора в северной России. В статье предлагается рассмотреть то, какую роль выполняет дружка в зависимости от статуса занимаемого им по отношению к жениху, особенно в том случае, когда дружкой становится юноша (брат или друг жениха). Есть основания выбирать дружкой юношу, так как функция дружки имеет тесную связь с молодым поколением в свадебном обряде. Раньше в качестве дружки мало где постоянно выбирали юношу, роль дружки — юноши всегда была занижена. К тому же в этом случае наблюдаются 2 тенденции положения дружки среди других участников. 1. Дружка выполняет меньше функций: старшие участники берут на себя больше ролей; 2. Он все-таки остается главным действующим лицом: роль всех других участников уменьшается. Первая тенденция, попытка сделать юношу дружкой при сохранении прежних социальных отношений, редко бытовала в северной России. В большинстве местностей наблюдается другое решение этого вопроса: оди юноша или несколько юношей принимали участие в свадебной церемонии в

*Кто такой дружка?: к вопросу об участниках в русских крестьянских свадьбах (Игауэ Нахо)

**言語文化研究科博士後期課程

роли полудружик или низших дружек, что придавало главному дружке юношеский характер. Это, может быть, отражает культурную разницу между двумя регионами. Вторая тенденция возникла в связи с развалом бывшей обрядовой системы. И эта тенденция отражает социальные изменения. Повысился статус жениха и его друзей, и важность участников свадебной церемонии уравнилась. И это наблюдается и в современных свадьбах.

1 はじめに

ロシア農村の伝統的な結婚儀礼では、重要な参加者（свадебные чины）に役割や地位を表す名前が与えられている。代表的な名称であるドルーシカ（дружка、またはドルーシコ дружко など）、トイシャツキー тысяцкий、スヴァット сват、スヴァーハ сваха（女性）、ボヤーリン боярин などは、16 世紀の貴族の結婚儀礼の記録にも現れるが¹⁾、ドルーシカは其中でもっともよく知られた名称である。彼は花婿方の婚礼行列（поезд）にかかせない人物で、花嫁の獲得でも中心的な役割を果たし、宴会でも機知を披露する司会をして、結婚式をリードする。ダーリはその『現用大ロシア語詳解辞書』（1880-82 年版）の中で、ドルーシカを次のように定義している。「……花婿側の婚礼メンバーの二番手（一番手は старший боярин, тысячник）。既婚の若者で、主要な取り仕切り役、活発で、儀礼全体を知っており、お喋りで、全体を楽しませる音頭取り。また新郎新婦を（床に）連れ去り夜番をする。彼の助手は подружьи²⁾や третьяк²⁾である。シベリアではもっとも尊敬される参加者であり、通であり、全ての呪いを防ぐ呪術者である。未婚者から選ばれた 2 人以上のドルーシカがいるときは、助手や召使や шафер²⁾である」。しかしドルーシカの地域差は想像以上に大きく、彼の全体像はいまだに明確ではない。

社会人類学は常に、儀礼と社会の関係に関心を払ってきた。儀礼は伝統的な社

¹⁾ 『家庭訓 Домострой』 67 章および、Богословский С. П. К номенклатуре, топографии и хронологии свадебных чинов (Пермский краеведческий сборник, вып. 3, 1927, 1-64) 参照。

²⁾ шафер 自体にも様々な意味がある（伊賀上）。

会秩序や思考を確認、補強し、それゆえに、現存の社会関係を反映するとともに、社会的思考の形成も促し、社会関係に影響を与えていく³⁾。ドルーシカという儀礼の中心人物の役割や属性（選択幅）の違いは、儀礼全体、ゆえに社会関係全体の差異を反映し、またそれらに異なった影響を与えているはずである。著者は以前、結婚儀礼における若者の役割に関する論文で、ドルーシカを含む親族の役割についても若干触れたが⁴⁾、本論文ではロシア農村社会の地縁、血縁関係および年齢集団と儀礼の関係をさらに明らかにするために、ゼレーニンとグラーの研究に基づきながら、「ドルーシカとはだれか」という問いに対し、彼の属性と役割の関係からアプローチするものである。なおドルーシカに関する具体的な知識は本論文の理解に不可欠であるため、多くの部分をその記述にあてたことを断っておく。

2 先行研究と研究方針

有名なドルーシカもその複雑さゆえか、詳細な研究は多くない。彼の言語活動面は早くから注目されていたが⁵⁾、ドルーシカの役割の一部だけではなく、その全体およびそれぞれの部分の関係を最初に観察したのは、ゼレーニンであった⁶⁾。彼は、特にヴァトカ地方のドルーシカの口上（приговоры）をとりあげながらも、ドルーシカ全体に見られる特徴を考察し、その活動の中に、1. 花婿および花嫁側の親族の代表、2. 花婿と花嫁の親族の仲介者、3. セレモニーマスター（昔からの儀礼と習慣の通で監視者）、4. 客を楽しませる道化者、5. 結婚式の参加者を守る呪術者（знахарь）、の5つの異なった役割が含まれていること、またそれらが密接に関係していることを指摘した。ゼレーニンは婚礼メンバーの多様性にはあまり触れなかったが、20年代にボゴスロフスキーが婚礼メンバーの名称全体を収集、分類し、共時的、通時的な多様性と役割と名称の混乱、儀礼の縮小

³⁾ S. F. Moore and B. C. Myerhoff. *The Secular Ritual* (Van Gorcum, Assen, Amsterdam, 1977) p.5-7参照。

⁴⁾ 「帝政ロシア農村における結婚儀礼」『大阪大学言語文化学』vol.5, 1996, 19-32。

⁵⁾ ドルーシカの口上は数多く収集されている。近年ではТоропова А. В. が学位論文において、口承文芸学的視点からドルーシカの言葉を考察している（Наговор дружки в поэтической системе свадебного фольклора. Гос. педагог. инст. им. Герцена, Л., 1975）。

⁶⁾ Зеленин Д. К. Свадебные приговоры Вятской губ.. Вятка, 1904.

化を指摘した⁷⁾。彼はもちろんだルーシカにも言及しているが、その役割が想像以上に多様であることを明らかにしたのは、グラーであった⁸⁾。彼はゼレーニンの研究に基礎をおきながら、北ロシアでドルーシカと呼ばれる人物の役割、属性を観察し、ドルーシカが花婿側、花嫁側どちらか一方にさえ固定されていないこと、人数も1人、2人から12人までと幅があること、その選択幅も、花婿の同世代（友人、兄弟、姉妹の夫）、上の世代の代表（教父、叔父）、道化者（親族関係の有無は問わず）、呪術者（колдун⁹⁾）など幅広く、また同一地域でさえ複数の選択肢が存在し、地理的な分類も出来ないほど多様であること、またドルーシカとその他のメンバーとの関係については、同一人物が見合いでスヴァット、結婚式でドルーシカと呼ばれたり、結婚式の日スヴァットともドルーシカとも呼ばれたりすることがあること、ゼレーニンの挙げたドルーシカの役割を、他の人々（トイシャツキー、スヴァット、スヴァーハ、呪術者、父母や親戚など）が行ったり、下位のメンバーに割り振られたりする場合があること、ドルーシカが、重要メンバーであるトイシャツキーやスヴァットにも、パンやビールを管理する若いメンバーにも近づきうるし、彼のランクも一番から三番手まで差があること、それでもリボンやタオルなどを腰や肩に結んで他から区別されているのが、ドルーシカのもっとも一般的特徴であること、を指摘した。グラーによるドルーシカの多様性の指摘は、登場人物の研究の上で大変貴重であったが、彼の論文はかなり短いせいでドルーシカの多様性を述べるにとどまっており、分析の根拠について不明瞭の点がある他（一番手、二番手の定義など）、属性と役割の相関関係、時代の違いや都市の影響などが述べられていない。また彼自身がいうように、北ロシアしか分析していない。だがグラーと同じほどの詳細な分析を他の地域ですることは、かなり困難であるのも事実である。

本論文では、多様性の問題の中でも、年齢、親族関係といったドルーシカの属性の問題をとりあげる。まずはドルーシカの基本的な性格を知るために、いくつかの地域のドルーシカを観察し、多様性の中にもドルーシカ全体に共通する特徴があるかどうかを確認する。その後、属性と役割にどのような関係があるか、属性の違いが何から生じているかを「青年＝ドルーシカ」に焦点をあてて考える。

⁷⁾ Богословский (前述) 参照。

⁸⁾ Гура А. Б. О роли дружки в севернорусском свадебном обряде. В кн.: Проблемы славянской этнографии. "Наука", Л., 1979, с.162-172.

⁹⁾ 一般に колдун は害をなし、знахарь はまじない治療をするといわれるが、その違いはかなり主観的なものである。

青年の選択は、革命前の農村社会では稀なケースであるが、現在でもその名称が保持されている場合は、典型的なパターンであり、変化の要因が探しやすい。また、結婚儀礼の中では把握しにくい青年の地位と意味の問題の解明にもつながるだろう。研究対象は、ドルーシカがよく記録されている 19 世紀後半から 20 世紀初頭の北ロシアおよび沿ボルガ地方であるが¹⁰⁾、それ以降の変化も見。資料としては、出版資料や古文書保管所資料の他、著者が 1997 年 8 月にヴォログダ県グリャザベツ地方で行ったフィールドワークの結果も利用した。

3 ドルーシカの役割の具体例

花婿側のドルーシカ¹¹⁾の役目には、1. 結婚式での口上、2. 宴会の世話、3. 呪術を防ぐ、また呪術をかける、4. 贈物を配る、5. 婚礼行列の先頭、代表、6. 花嫁の買い取り、7. 床入り儀礼などがある。だが、どのドルーシカもこれら全てを行うわけではない。次にドルーシカの役割が大きい例と比較的小さい例を挙げ、地域差と共通点を見てみよう。

3.1 ドルーシカの役割が大きい例

ドルーシカの役割が大きい例としては、呪術者の要素が薄いコストロマ県キネシェムスキー郡の例 (A) と、呪術を心得た専門家が雇われるニージニーノヴゴロド県ヴェトルシュスキー地方マカリエフスキー郡の例 (B) をあげる¹²⁾。(A) ではドルーシカは、結婚式前日のジェヴィーチニク (花嫁と娘たちの別れの会) から結婚式二日目まで登場するが、(B) は結婚式当日の記述しかない。(A) のドルーシカの選択基準は不明だが、(B) の場合、親戚でも他人でもよいが、大部分は専門家が呼ばれることが、述べられている。彼らは自分の言葉やしれを、遺産のように息子や近い親戚に引き継いでいき、自分の技術については語りたがらない。さらに一流のドルーシカは、呪術を防ぐだけでなく、かけることもできる

¹⁰⁾ ドルーシカという用語は、経済的に結婚式を祝うのが難しくなった 1930 年代ころから徐々に使われなくなっていた。

¹¹⁾ 花嫁側のドルーシカは、ほとんどの場合花嫁の兄弟など、近い親族の青年が行い、花婿側のドルーシカの出迎えや花嫁の買い取りの交渉といった限定された役割を担っている。

¹²⁾ Шейн П. В. сост. Великорусс в своих песнях, обрядах, обычаях, верованиях, сказках, легендах и т. д. (СПб., т.1, вып. 2, 1900) pp.685-710 参照。

と思われている。それでは、上のまとめに従って両ケースを具体的に見てみよう。

食事または宴会は、花婿宅（婚礼行列の準備）、花嫁宅（軽い食事）、再び花婿宅（大宴会）の3回（(B)では4回のこともある）行われるが、その全てにおいて、ドルーシカは花婿や花嫁の世話をしたり、独特の言い回しで食事や祝福を要求したり、祈ったりして、儀式を進行させる。彼の口上には、物語のような表現が折り込まれており、たとえば(A)で花婿の両親に花嫁宅に行く息子を祝福させる時は、次のように言う。「お父さん、あなたは広い庭、高い家、新しい楼、明るい部屋、新しい部屋に……お客の皆さんを座らせました……(トィシャツキーを筆頭に婚礼メンバーの列挙)……公は立ってあなたをテーブルのところに呼び、あなたに深くお辞儀をする。公に金と銀を、塩とパンを与えて下さい」¹³⁾。ドルーシカは、見物人を含む老若男女にも常に気を配り、祝福を頼んだりご馳走したりするが、それはしばしば冗談や皮肉の形をとる。(A)ではドルーシカは娘たちにこう呼びかける。「美しい娘たち、姉妹たち、模様の名人たちよ。細く紡ぎ、音をたてて織った。箴(おさ)を壊してしまって、窓から捨てた。あなたたちの仕事は、蓋をちらちら見てクリームをかすめ取ること、丸パンをこねて庇のうしろに隠して、牧夫に持っていくこと。新婚の公の旅立ちを祝福してください」。同じような皮肉が、男たちや若い農婦、年をとった女や子供たちにも向けられる。

ドルーシカは、客への御馳走や贈物の配付、およびその指図も行うが、これは他のメンバーがすることも多い。(A)ではスヴァットも皆に御馳走し、(B)では花嫁のスヴァーハがドルーシカとともに贈物を配る。またここでは珍しく、婚礼行列は教会の後再び花嫁の両親宅で食事をするが、この時娘たちがリボンで飾られたピローク(パイ)を持ってくる。これに対しトィシャツキーが代金を払い、ドルーシカがピロークの表面を切って中の具を客に配るが、リボンを一つでも落とすと、娘たちに不器用さを罵られる。

呪術に関してはスヴァーハや呪術者が携わることも多いが、ドルーシカの行為としては、花嫁宅や教会へ出発する前に、アイコンや十字架、鞭などを持って婚礼行列の回りを3回回るというのがもっとも有名で、(A)(B)ともに見られる。ドルーシカは道中だけでなく家の中でも常に、呪術をかけられないように気を配っている。教会を出る瞬間も危険だが、(B)ではこの時は特にスヴァーハが気をつける。

¹³⁾ 公 князь は花婿、金と銀はお金、塩とパンは祝福を表す。

花嫁宅へ向かう婚礼行列の順番は、(A) ではまずドルーシカとその助手、次にトィシャツキーと花婿、さらに大ボヤーリン (большой боярин 大貴族) と小ボヤーリン、その後ろにスヴァット (仲人) とスヴァーハ (花婿の近い女の親戚)、最後に残りの親戚となる。花嫁宅から教会へ向かう時は、花婿の後に花嫁とスヴァーハが、花婿の客の後ろに花嫁の客がつく。(B) でもほぼ同じで、まずドルーシカ、その後ろに花婿と教父 (トィシャツキーでもある)、次に花嫁とスヴァーハと御者 (花嫁の兄弟)、その後ろに大ボヤーリン (花婿のオジ)、小ボヤーリン (近い親戚) などを含む全客が連なる。両地域とも婚礼行列は花嫁の家の近くで一度止まり、ドルーシカと助手だけが花嫁の家に行き、婚礼行列の入場許可を求める。(B) では、この家の主人は誰か、今日結婚式をする取り決めをしたか、客を待っていたかなどを聞き、「70 組の馬車」でやって来た「7000 人」の客の出迎えを求める¹⁴⁾。花婿側の全員が家に入る時も、ドルーシカは出迎えた両親に続いて真先に入る。(B) で婚礼行列が教会から花婿宅に直接向かう場合、教会へ出発した後ドルーシカは花嫁宅に一度戻り、花嫁の両親と親族を花婿宅に招待する。また (A) では結婚式の二日目に、ドルーシカと花婿が妻の母と全親戚を自宅の宴会に呼びに行くが、このような例も多く見られる。

花嫁の買い取り儀礼は、(A) ではドルーシカに助けられた花婿が、花嫁の横 (花婿の席) に座っている花嫁の弟 (または身近な親戚) と行う。(B) ではドルーシカが娘たちを、トィシャツキーが兄弟を買収するが、彼らは教会に行く時にも再度抵抗を試みる。この時はドルーシカが兄弟の機嫌をとり、娘たちからの花嫁の奪回は、花婿自身が行う。村人が、婚礼行列に行く先々で止めて酒などを要求するのも、よく知られた習慣で、(A) でもドルーシカがご馳走している。

花婿宅では宴会の途中、しばしばドルーシカとスヴァーハが新郎新婦を床につれていくが、(A) ではアイコンを持ったドルーシカだけが行う。この後しばしば、ドルーシカとスヴァーハの主導で花嫁の純潔を祝う (またはその逆) 儀礼があるが、ここではその記述はない。

3.2 ドルーシカの役割が小さい例

ドルーシカの役割が小さい例としては、エデムスキーによるヴォログダ県コク

¹⁴⁾ 地域によっては、花嫁側のドルーシカとなぞの掛け合いをすることもある。ノヴゴロド県ベラゼルスキー郡、ヤロスラブリ県ボシェホンスキー郡 (Шейн, pp.524, 655-656) 参照。

シェニガ地方の記述を挙げる。これはまさにグラーがドルーシカのランクが低いと指摘した地域に含まれる¹⁵⁾。婚礼メンバー（прибор）の記述は、教会結婚式の前日（свадебный день）に現れる。この日の夕方、花嫁方ではジェヴィーチニクが、花婿宅では花嫁宅へ出発する前の宴会が行われる。この時上座にはトイシャツコイ тысяцкой が座り、その一方の側に花婿、教母（божатка）、スヴァーチャ сватья（女性）、女性の婚礼メンバー、別の側に男性の婚礼メンバーが座る。この時花婿が客に酒をご馳走するが、客の呼び出しはトイシャツコイがする。花嫁宅へ出発する時は、スヴァット（時にドルーシカ）または呪術者（сторож）が長いまじないを唱える。婚礼行列は、スヴァット（仲人）、スヴァーチャ、トイシャツコイ（普通神父）、教母、ドルーシカ、フリャプチャー хряпчий（食事係）、兄弟、オジなどからなるが、どのような順番で行くかは記録されていない。花嫁宅に着くと、スヴァットまたはドルーシカが一人ソリから降りて入場許可を求め、呪術者（呪文の知識があるならスヴァットでも可）がまじないを唱えながら先頭の馬を引き入れる。彼らの出迎えは花嫁の兄弟またはオジが行う。ここでトイシャツコイが花嫁の親戚に酒をご馳走し、花嫁の兄弟、スヴァット、トイシャツコイ、花婿、スヴァーチャ、花婿の兄弟、残りの親族の順に家に入る。テーブルに着くとトイシャツコイはまた酒の瓶を出し、スヴァットがスヴァーチャの持ってきたコップに注いで、花嫁方に御馳走する。この後スヴァットとスヴァーチャは、それぞれ酒とビールをもって花嫁と娘たちに御馳走しに行くが、花嫁はなかなか杯を受けとらず、長い泣き歌でスヴァットを苦しめる。その後花婿側は花嫁の披露を要求し、花嫁の兄弟と親戚の女性が彼女を連れて来る。花嫁はスヴァット、花婿の兄弟、その他の親族の順に酒をご馳走し、贈物をする。このあと娘たちと青年たちのホロボード хоровод 遊びが始まるので、花婿側は一度家に帰るか別の部屋で休む。花婿は普通残って、花嫁と時間を過ごす。

翌日（свадебный день）は朝早くから教会へ行く準備が行われる。花婿たちは再び、自宅または別の部屋からやってくるが、今回の先頭は帯の上に手拭いを締めた若いドルーシカである。彼を迎える花嫁のドルーシカも手拭いを締めている。花嫁のドルーシカは、花婿のドルーシカと親戚にビールを勧めるが、花婿の

¹⁵⁾ Едемский М. Б. Свадьба в Кокшениге Тотемского у. Вологодской губ.. Живая старина, No.19, вып.1-4, 1910, 1-137. 革命前の結婚儀礼の記述の中で、ドルーシカの役割が小さい例を見つけるのは難しい。というのは、記述もれの可能性があるからである。ここではかなり詳しい記述を選んだ。

ドルーシカは口を拭うもの（贈り物）も要求し、それを探して見つけねばならない。この後も花婿のドルーシカは部屋に先頭で入っていき、泣き歌を歌っている娘たちからビールで席を買い取ろうとする。花婿側の客たちが席に着くと、ドルーシカとスヴァーチャは娘たちのところに行って酒を御馳走し、それぞれ娘たちにキスをする。花嫁の父が反抗する娘を連れてくると宴会が始まるが、この時花婿のドルーシカはパンを配る。娘たちは、トイシャツコイ、次にドルーシカを筆頭とする青年たち、そして残りの客の順に祝い歌を歌ってお礼をもらう（スヴァットは1日目と較べるとランクが低い）。この後教会へ向かうが、先頭は花婿とトイシャツコイ、次に花嫁とスヴァーチャ、そして残りの客の順である。この婚礼行列は普通呪術者が導く。帰りの先頭はトイシャツコイとスヴァーチャで、花婿と花嫁は二番目の櫓に乗る。花婿の家にはトイシャツコイが最初に入る。宴会の後二人を床に連れていくのは、呪術者が花婿の両親である。この地方の花嫁宅での儀礼は、他にあまり例のない二部制で、一日目はスヴァットの、二日目はドルーシカの役割が大きい。これは、実際の結婚式は二日目から始まることを意味していると思われる。

エデムスキーはすでに、結婚式が簡略化されていること、スヴァットとドルーシカの口上が聞かれなくなりつつあること、また、重要メンバーの役割の境界が曖昧になっていることを指摘しているが、この傾向は、より広範囲にわたって行われた1975年の調査にはっきり現れる¹⁶⁾。この記述では、一日目と二日目の儀礼は融合し、以前のような意味の違いは感じられない。ジェヴィーチニクは、一日目と二日目の間のホロボット遊びとそれに先立つビールのご馳走を意味するようになっている。二日目のドルーシカどうしの挨拶と、ドルーシカとスヴァーチャによる娘たちへの酒の御馳走は、一日目に移動し、それぞれ花婿たちが初めて到着した時と、スヴァットが花嫁に酒を御馳走する前に行われる。花婿側の重要婚礼メンバーにあまり変化はないが、教母がスヴァーチャを兼ねる場合が増えている。しかも後のケースでは、スヴァーチャの役割が多く記録され、その分トイシャツキーとスヴァットの役割が縮小している。彼女は花婿（花嫁）を守ったり、花婿側を代表して、花嫁の親族や娘たちと儀礼的な会話を行ったりする。花婿側が席につく順番も、スヴァーチャ、花婿（上座）、スヴァット、トイシャツキー

¹⁶⁾ Балашов Д. М., Марченко Ю. И., Калмыкова Н. И. Русская свадьба. "Современник", М., 1985. 調査は60-80歳の住民（主に女性）に対して行われ、20世紀初頭から革命前後の儀礼が記録されている。

の順である。ドルーシカはフリャプチャーとともに、テーブルの外側に座る。ドルーシカは以前と同じく、若い、時に未婚の親戚の青年（花婿の兄弟、従兄弟または友人）で、腰に手拭いを締めている。彼は酒を注いだり娘たちにご馳走したりする他、花嫁の家にも最初に入り、その後にスヴァーチャと花婿が続く。だが彼の役割はさらに縮小し、重要メンバーの中の四番手になっている。彼が花婿とともに台所の花嫁のところに行ったり、娘たちから席を買い取ったりすることもあるが、それらは全て、スヴァーチャやスヴァット、トイシャツキー、さらには花婿や各人が行うことのほうが多い。口上もますます忘れられている。

4 ドルーシカの活動舞台と基本的役割

多岐にわたるドルーシカの役割の中に、どのような共通点があるだろうか。まずはドルーシカの活動舞台を限定したい。ドルーシカの役割が大きいと、ほとんど全てに係わるような印象があるが、よく見ると見合い、結納（сговор）、歌、花嫁の髪形変えにはめったに現れない。仲人以外の特別な役割への任命は、結婚式間近に行われ、結納前の任命は、例外的である。婚礼歌、特に泣き歌は、娘たちと女性だけが歌う。花嫁の髪を既婚女性風に編む儀礼は、花嫁にとってもっとも危険な移行期にあたり、普通男性は近づくことを許されない¹⁷⁾。そのためドルーシカの基本的な活動時間は、結婚式当日とその前後（結婚式直前の儀礼と結婚式の2日目）に限定される¹⁸⁾。

しかしこの限定された舞台の中でさえ、全てのドルーシカに共通する役割はほとんどない。もっとも基本的な役割は婚礼行列の先頭に立つことだが、それでも例外は見つかる¹⁹⁾。だがその場合でも、花嫁の父母から入場の許可をもらうとか、一番に花嫁の家に入るとかの、実質的には先頭を意味する役割を、少なくとも一つは担っている。逆にドルーシカが宴会しか指揮しない例や、呪術にしか携わら

¹⁷⁾ 花嫁の兄弟が参加する地域もある。Шейн р.396（アルハンゲリスク県ピネガ）参照。

¹⁸⁾ グレーが指摘したように、ドルーシカが教父や仲人自身だったり、同時に二つ以上の名称が与えられている場合は、ドルーシカの活動場面が大幅に拡大することになるが、これは、一人の人物による二つ以上の役割の兼任である。このような混乱がおこるのは、名称や役割の形態化のためである。

¹⁹⁾ 上記コクシェニガの事例を参照。またドルーシカの前に騎乗者が数人いる例（彼らの属性はわからず）は、Свадьбы, детские игры, гадания, обряды и суеверия запис. И. Востоковым в Рязан. губ. (Научный архив ИЭА РАН, фонд ОМАЭ, д. 124) л. 10 参照。

ない例は、今のところ見あたらない。以上から、ドルーシカは役割の内容および大小に違いはあっても、婚礼行列の先頭またはリーダーの役割を担っていると言えよう。リボンなどによる特徴付けも、婚礼行列の先頭の意味を含んでいる²⁰⁾。地方によっては、ドルーシカと呼ばれる人物がいない場合や、名称の取り違えが起こっていると思われる場合があるが²¹⁾、この場合一つのめやすとして、婚礼行列の先頭に立つ人(特に花婿宅から花嫁宅まで)、または一番に家に入る人を「ドルーシカ」のペルソナと見なすことができるだろう。

5 属性と役割の関係

前述したように、グラーはドルーシカの選択肢として、花婿の同世代、上の世代、道化者、呪術者があることを示したが、これを親族関係と世代から見ると、上の世代の親族、同世代、能力のある人（プロ、アマチュアの他人。同村人、呪術者など）に分けることができる。一般に考えられているように、ドルーシカは上の世代の親族か能力のある人が行うことが断然多い。特に花婿の年配または中年の親戚は、他のメンバーも親族か親しい隣人であることを考えると、もっとも自然な選択である。ドルーシカの専門職化も、彼に集中した役割を考えれば、当然の結果といえる²²⁾。ドルーシカに役割が集中するのは、この地方でドルーシカの口上や呪文が発達しているからである。儀礼の監督者でありナレーターでもあるドルーシカは、他のメンバーから頭一つでた特別な存在であり、全ての者——見物人さえも——がドルーシカを仲介として儀礼に参加する²³⁾。このようなドルーシカの役割および監督範囲の拡大、特殊化は、親族の中に適任者を見つけることを困難にし、また親族である必要性も減少させる。グラーは、一般にドルーシカの選択肢についての記述が少ないことに触れているが、これは、属性よ

²⁰⁾ この特徴付けが婚礼行列の参加者全員に拡大されていることはあるが、逆にドルーシカが特徴付けられていないのに、他のメンバーが特徴付けられることはない。またドルーシカを際立たせる付属物が、呪術者と関係の深いフライパン、鈴などのこともある。Гура pp.166-167 参照。

²¹⁾ スヴァットが中心的名称である例は、トヴェーリ県カリャジンスキー郡の旧国有地農民(Шейн, pp.632-635)、スヴァットが時にドルーシカと呼ばれる例は、トウーラ県ボドヤコヴレヴァ村(Шейн, pp.575-582)を参照。

²²⁾ 専門化は仲人でも進んでいた。

²³⁾ ゼレーニン は、ドルーシカの口上のモノローグの性格を指摘しているが、このこともドルーシカへの言葉の集中を表している。Зеленин, p.8 参照。

りも能力が重視されたことと関係があるだろう。なお、他の重要メンバーではなくドルーシカに口上が集中しやすいのは、ドルーシカの基本的な役割の舞台である婚礼行列が、共同体や親族と関わりが深く、そのため口上によって婚礼の当事者間、および共同体内（呪術世界も含む）の関係を調整することが彼に要求されるからと思われる。メンバーの筆頭とされることの多いトィシャツキーが、親族頭のための名称で、役割の拡大に耐えられないことも、大きな理由の一つであろう。スヴァットも本来は仲人の意味である。

では、専門家の対極にある青年がドルーシカに選ばれるのは、どのような場合だろうか。トィシャツキーやスヴァットと違って、ドルーシカには青年が積極的に選ばれる理由がある。それは、1. 花婿の代理という意味で同世代がふさわしいこと、2. 娘たち（花嫁の女友達）との対応、3. 婚礼行列の攻撃的性格、が関係しているからである。特に1に関しては、花嫁側のドルーシカはほとんどいつも花嫁の兄弟が従兄弟であることから、妥当といえよう。しかし前述したように、ドルーシカが未婚（時に既婚）の若い男性と規定されるケースは少ない。ボゴスロフスキーは、ドルーシカは一般に経験豊かな既婚者と考え、青年が選ばれるのは、ドルーシカとしての役割が縮小している時と考えた²⁴⁾。実際青年ドルーシカを観察すると、その役割は他の場合よりも小さい。ただしここには二つの傾向が見られる。つまり他のメンバーの役割が大きくドルーシカのランクが低い場合と、ドルーシカを含むメンバー全体の役割が縮小された結果、ドルーシカは上位のランクを占め続けている場合である。前者は前述のкокшенига地方に、後者は、アルハンゲリリスク県シェンクルスク郡の例に見られるが²⁵⁾、特に現代の結婚式に顕著である。現代のロシア都市部、特にモスクワなどの大都市では、結婚登録に立ち会う「立会人 свидетели」と宴会のしきり役の「タマダー-тамада」くらいしか特別な名称は存在しない場合が多いが、農村でも同じ傾向が見られ、伝統的な名称が保持されている場合でも、ドルーシカ以外は使用されなくなっていることが多い。立会人および現代のドルーシカは、現欧米の best man と maid of honor のように圧倒的に花婿と花嫁の親友男女から選ばれ、時には先頭を行っ

²⁴⁾ Богословский, p.18 参照。

²⁵⁾ ここでは、花婿の兄弟を含む多くの未婚（時に既婚）の青年たちがドルーシカと呼ばれ、馬に乗って婚礼行列の先頭に行く。前日のジュヴィーチニクでも、青年たちは馬に乗って花婿と教父を先導して花嫁の所に行き、泣き歌も彼らに最初に歌われる。Боголепов К. И. Свадебный обычай крестьян Кургоминского правления Арханг. губ. (Живая старина, вып. 3, 1899) 386-388 参照。

たり花嫁や道を買い取ったりと活躍するが、以前と較べれば役割は随分と縮小している²⁶⁾。

6 ドルーシカの青年性に関する問題点

青年ドルーシカの最初のケースは、ドルーシカの青年性を重視した故の役割の振り直しと見ることができる。言うなれば、他の地域でのボルドルージェエなどがドルーシカに昇格し、ドルーシカとしての役割の多くは、他の重要メンバーに移行したような状態である。この、ドルーシカの青年性と旧来の儀礼体系を両立させようとするケースが、実際にはほとんど観察されないのは、なぜだろうか。これはグラーが北ロシア内でのドルーシカのランクの違いとして触れたように、北西文化圏（ドルーシカのランクの高い地域）と東、南東文化圏（ドルーシカのランクが低い地域）の違いの可能性がある。だが、それが実際に青年ドルーシカと結び付いているかは不明であり、またランクの低い青年ドルーシカの例は中央ロシアでも見られるので、今のところ地域差を断定することはできない²⁷⁾。ここでは、ドルーシカの異なった性質を両立させようとする試みが、すでに別の形で行われていることを強調しておこう。それは、青年を助手のボルドルージェエや下位のドルーシカに選び、ドルーシカを複数にすることで、この問題を解決しようとするものである。こうすれば、たとえ主となるドルーシカが年配者でも、全体としてドルーシカに青年的な性格を付与することができ、経験の豊かさと若者の機敏さ、花婿への近さと重要人物としての尊厳を同時に表すことができる。助手の存在は、ドルーシカの物理的な役割の拡大への対処だけではなく、異なった性質を一つのカテゴリー内で表す試みでもある。このような試みは、ドルーシカにとって、青年性が重要な要素であることを示すと同時に、その重要な意味を中心に据えられないほど、他の役割の持つ意味が大きくなっていることを意味している。

²⁶⁾ 著者の行ったグリュザヴェツ地方での調査では、ドルーシカという名称は消えて立会人が定着していた。なお立会人の出席は、法的義務ではない。伝統がよく保持されている例としては、ブスコフ州の事例（Ивашнева Л. Л., Разумовская Е. Н. Усвятский свадебный ритуал в его современном бытовании. СЭ, No.1, 1980）を参照。現代の都市部の結婚式は、戸籍登録科（ЗАГС）での登録と名所の訪問を含む市内巡行、そして家またはレストランでの親族と友人たちが同席する宴会からなり、農村の結婚式も、これに幾つかの伝統的要素が追加された単純なものになっている。ソ連崩壊後流行し始めた教会結婚式は、結婚登録の後に行われる。

²⁷⁾ Гуря р.170、トヴェーリ県カリヤジンスキー郡ヤレンスコエの旧農奴の例（Шейн, pp.635-640）を参照。

最初のケースが、旧来の社会関係を保持しているのに対し、二番目のケースは、19世紀の資本主義の発達に伴う、都市の影響による農村社会の根本的な変化の兆しを反映している。ここでは青年、つまりは花婿の個人の地位の高まりが見られるが、これは儀礼の形骸化と遊戯化によるところが大きく、共同体内での年齢集団の強化というよりは、家族や共同体の慣習的な権力の喪失による若者の地位の相対的な上昇の反映であり、花婿や花嫁の個人的関係を核とした、参加者の重要性の平等化の兆しである。

だが、儀礼の遊戯化と参加者の平等化は、すぐにはドルーシカの総青年化につながらなかった。観客（「呼ばれていない客」）の重要性など、共同体の意味が保持されたことや、花婿の代理の意味を強調する必要性も減少したことが、積極的な青年化の推進を必要としなかったのだろうが、革命後の若者による伝統の軽視や、戦争による青年人口の減少も影響していると思われる。さらに、第二次世界大戦をはさんだ結婚式空白期以降、特に60年代以降の青年ドルーシカの固定化は、親族が重視されずに成功しなかったという50年代後半からのコムソモール結婚式、新しい伝統の創造の一環として、50年代末から60年代にかけて定着した立会人制度、都市と農村の同一化指向など、政府を主体とした新しい伝統の創造の動きと、深い関係があるに違いない²⁸⁾。これによって、花婿と花嫁の血縁に縛られぬ個人としての人格と、社会（国家）との絆が強調され、ゼレーニンが花婿の「друг (жениха), другой я²⁹⁾」（花婿の友人、もう一人の自分）と解釈した花婿の代理という意味が、最重要性を持つにいたったと思われるが、この現代の変化は、今後の課題としたい。

7 終わりに

ドルーシカの属性は、地域文化と時代の影響が複雑に絡みあって決定される。19世紀、特に革命後の変化は、ドルーシカの歴史の中でも時代の影響がはっきり見られる希有な段階であるが、この時代の強い影響が、ドルーシカの地理的分

²⁸⁾ 革命後の結婚儀礼の変化については、Жирнова Г. В. Брак и свадьба русских горожан в прошлом и настоящем ("Наука", М., 1980) pp.79-119, Зорин Н. В. Русская свадьба в среднем Поволжье ("Издательство Казан. унив.", Казань, 1981) pp.176-187, Русские: этно-социологические очерки ("Наука", М., 1992) 参照。

²⁹⁾ Зеленин, с.4.

類を、よりいっそう困難にしているようだ。ドルーシカの属性の多様性は、本来異なる属性に割り振られるべき役割が、口上という糸でドルーシカー人に結びつけられやすいことに端を発するが、口上の発達は、承認儀礼の少なさや、歌と儀礼の結びつきの弱さによる、北ロシアの結婚儀礼のドラマ性の強さ³⁰⁾とも大いに関係がある。複雑なペルソナであるドルーシカの謎を解明するには、結婚儀礼全体の傾向を、隣接する民族との比較も含めて見ていく必要があるだろう。

³⁰⁾ Чистов К. В. Семейные обряды и обрядовый фольклор. (В кн.: Этнография восточных славян. "Наука", М., 1987) pp.401-402 参照。